HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Archaeological Materials from Kalinino-1, 2 and Ivanovka in Southwestern coast of Sakhalin
Author(s)	Gorbunov, Sergei; Amano, Tetsuya
Citation	サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅 : 日ロ共同シンポジウム, 5, 160-169
Issue Date	2002-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73770
Type	conference paper
File Information	160-169.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Archaeological Materials from Kalinino-1, 2 and Ivanovka in Southwestern coast of Sakhalin

S.Gorbunov (Tymovskoe Museum)
T.Amano (Hokkaido University)

カリーニナ1遺跡　Kalinino-1

はじめに

サハリンのオホーツク文化に関する調査と研究が進展するにしたがって、その内容が北海道のものとかなり違う様相をもつことがわかってきた。たとえば、内陸部に立地する遺跡が例外的なものではないこと、あるいはまた竪穴住居内に動物祭祀の施設「骨塚」を設けないことなどをあげることができる。このような違いを単なる地域差ととらえてよいのか、それともオホーツク文化というものがそもそも一元的ではなく、複雑な系統・構成をもち、上のような違いはその表れとみるべきなのかは大きな問題である。

この問題に取り組むためには、両島のオホーツク文化の総合的な比較研究をおこなわねばならず、したがってそのためには水準のそろった資料が必要である。ところが両島間ではさまざまな資料的格差がみられ、とくに墓の資料については、これまでサハリンでは利用できるものがまったくといってよいほどなかった。

そうした状況のなかで天野は、S.V.ガルブノーフ氏の札幌での講演（1994.11.25）で、氏がカリーニナで人骨を手にいれ、しかもそれにはオホーツク式土器がともなったらしいということを知った。そこで天野は、ガルブノーフ氏に共同調査の実施を申し入れ、両者は95年に調査を開始した。ここに紹介するのは、95年春の現地確認・予備調査と同年秋の試掘調査の結果である。

Ⅰ 遺跡の概要

1）位置

サハリン最南部の西海岸、ホルムスク市とネヴェリスク市の中ほどカリーニナ村にある。

2）地形

全般にサハリン西海岸では、発達した海岸段丘が海に迫り、これを各所で小河川が解析して三角形の小規模な沖積地を形成している。カリーニナもその一つで、カリンカ川河口部に開けた沖積地である。規模は、東西すなわち奥行き500m以上、海岸部での幅（南北）は300m前後であり、このあたりでは比較的大きな方である。

カリーニナには砂丘がみとめられる。これは海岸から100mほど奥（東）の辺り（国道496号線付近）に頂部をもち、そこから内陸に向かってわずかに高度を減じつつも広い平坦面を成し、一方海に向かってかなり急な傾斜を示す。遺跡の主要部はこの平坦部とその海側にあるものと考えられる（A地点）。

現在カリンカ川は沖積地の南端を流れており、河口部近くの左岸には崖錐堆積物などからなる小さな扇状地様の地形がみられる。ゴルベフによるとかつてここには、小沢を夾んで竪穴住居のくぼみが3個あったとされるが、確認できなかった。ただ、扇端と砂丘の接する付近で東西に掘削された排水溝の壁の断面からはオホーツク式土器が採集できるので、左岸にも遺跡が存在することは確かである（B地点）。

3）付近の遺跡

ゴルベフによると、カリンカ川を1kmほど遡ったところにカリーニナ4遺跡があり、D.P.コルニェエフが石器と石片を採集している。

カリンカ川の南方1kmたらずに次の川がそそいでおり、その南岸にカリーニナ2遺跡が位置する。ここではガルブノーフがススヤ式土器と石器のほかにオホーツク式土器（突瘤文・刺突文・刻文）それに胴部が菱形スタンプ文で覆われた「靺鞨土器」を採集している。

他方カリンカ川から北に向かうと2km弱で次の川にゆきあたり、その右岸段丘上にカリーニナ3遺跡が位置する。川に沿う形で段丘縁近くに竪穴住居群が5軒連なっている。これらのうちで最も海よりにある平面5角形の住居址（1号）から縄目文をもつ土器片（鈴谷式？）を得た。

この段丘上の北東、山麓付近に新石器時代（宗仁式）の遺跡カリーニナ5が広がる。

4）従来の知見

問題の人骨は、ガルブノーフの説明によると、カリーニナ村の住人ワシーリェフ ヴィクトール氏が、その宅地内で風呂場建設の基礎工事中に掘り出した。ガルブノーフはワシーリェフ氏から、その頭蓋骨1とこれにともなう下顎1、肋骨6、およびこれらの骨と一緒に掘り出したという土器片1を譲り受けた。

石田 肇によるこれら人骨の所見は次のとおりである。年齢は15歳前後、性別未詳、形質はオホーツク文化集団の特徴をそなえている。

土器の方は口縁部である。断面が三角形をなす口縁部肥厚帯をもち、肥厚帯上に、口唇と並行な刻文を一列、斜めの刻文をその下に一列めぐらせる。器面の凹凸や肥厚帯の歪みが目立つ。オホーツク式土器江ノ浦式とみて差し支えなかろう。

II 調査の概要

1)カリーニナ1A遺跡の状況

人骨ほかを掘り出したヴァシーリエフ氏は現在ホルムスク市に住んでいる。われわれは、彼に会ってこれらの資料の詳しい出土状況などを確かめることがまだできていない。

ヴァシーリェフ氏の宅地は、カリンカ川河口近くの右岸縁にあり、国道496号の南約50m、海岸からは150mほど離れている。上記の遺物が出土したという風呂場は母屋の南側10mあまりのところで、川に張り出した砂丘の先端南角部にあたる。風呂場に接して南側に菜園の区画があり、貝殻などが散らばっているが、人工遺物は採集できなかった。

2) 層位と遺物、遺構

われわれは、この遺跡の概要（遺構と包含層の分布、墓地の有無など）を知るために、ワシーリェフ氏宅と隣のスイヌチェンコ氏宅の南に広がる畑に試掘壙を一箇所開けた。そこはワシーリェフ氏の風呂場の東南東10mあまりのところである。トレンチは平面矩形で、規模は90×110cmで、深さは100cmほどである。層位は上からつぎのとおりである。

Ⅰ層 40～45cm、茶褐色土（草の根の多い耕作土）

Ⅱ層 6～8cm、黒褐色土

Ⅲ層 11～20cm、赤茶色でやや粗粒の砂

Ⅳ層 30cm以上、黄灰色砂

Ⅰ層からⅢ層までで得られた主な遺物は土器片と骨角器、獣骨である。土器はすべてオホーツク式であり、口縁部肥厚帯上に沈線文あるいはさらに刻文をもつものが多く、肥厚帯のないものはⅠ層中の2点だけであった。断面が三角形の肥厚帯例は少なく、これには刻文あるいは型押文などが刻まれている。Ⅳ層では遺物ははるかに少なく、頭蓋をふくむ獣骨と鈴谷式土器片2点を得た。骨角器 (Fig.5:8・9)

には掘り具の柄や楔などがある。石器・石片は全層を通じてほとんどみられなかった。

II層下面に炭化材のやや集中する部分が2箇所みられ、これらの間にほぼ水平に、平石5個が北東壁から北西壁に連なる状態で延びていた。ここでは住居床面と認められるような固いしっかりした面をとらえることはできなかったが、石囲い炉である可能性が大きい。その時期はオホーツク文化中期（江ノ浦式）とみられる。

むすび

ここではB地点の資料をあわせて検討する。まず、A地点Ⅰ～Ⅲ層とB地点の土器は主に江ノ浦式であるととらえることができ、沈線文系文様が目立つ点から、礼文島香深井A遺跡の魚骨層Ⅲ$_{0}$-Ⅲの時期にに相当するものと考えられる。またA地点Ⅳ層で鈴谷式土器の包含層を確認でき、これまでの採集資料にもこの種の土器がかなりある。その一方で、十和田式と南貝塚式の土器はほとんどみられないので、ごく限られた調査範囲なので確定的なことはいえないが、この遺跡が断続的に形成された可能性がある。

さて、先に見つかった人骨が単独埋葬なのか、墓地を構成していたものなのかは最も関心のひかれる点である。ただいずれにせよそれが、未成年とはいえ幼児ではないので、本来であればそれなりの副葬品を伴っていた公算が大きい。その断片がなお周辺に残存する可能性もあり、さらに別の個体の墓もあるのかもしれない。

また、トレンチにかかった石組炉と考えられるものが竪穴住居に伴うのか否かを確かめることは、セトルメントパターン（それが北海道と共通するものであるのかは問題だが）との関係で重要な課題である。

この調査にいたるには、野村 崇、V.A.ゴルベフ、A.A.ワシーリェフスキー、禹 達順の各氏に大変お世話になった。記して感謝したい。

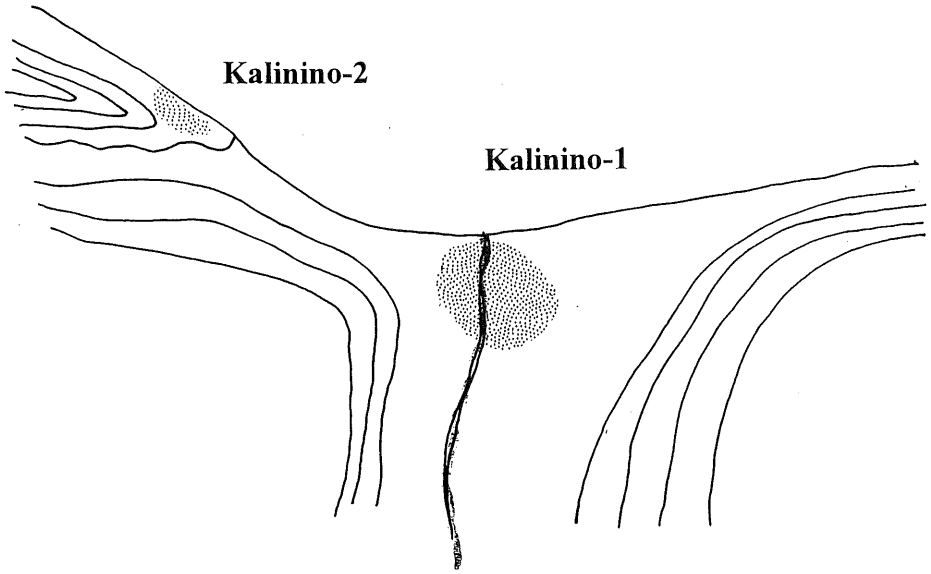


Fig.1 Kalinino-1 and 2 sites on Southwestern coast of Sakhalin

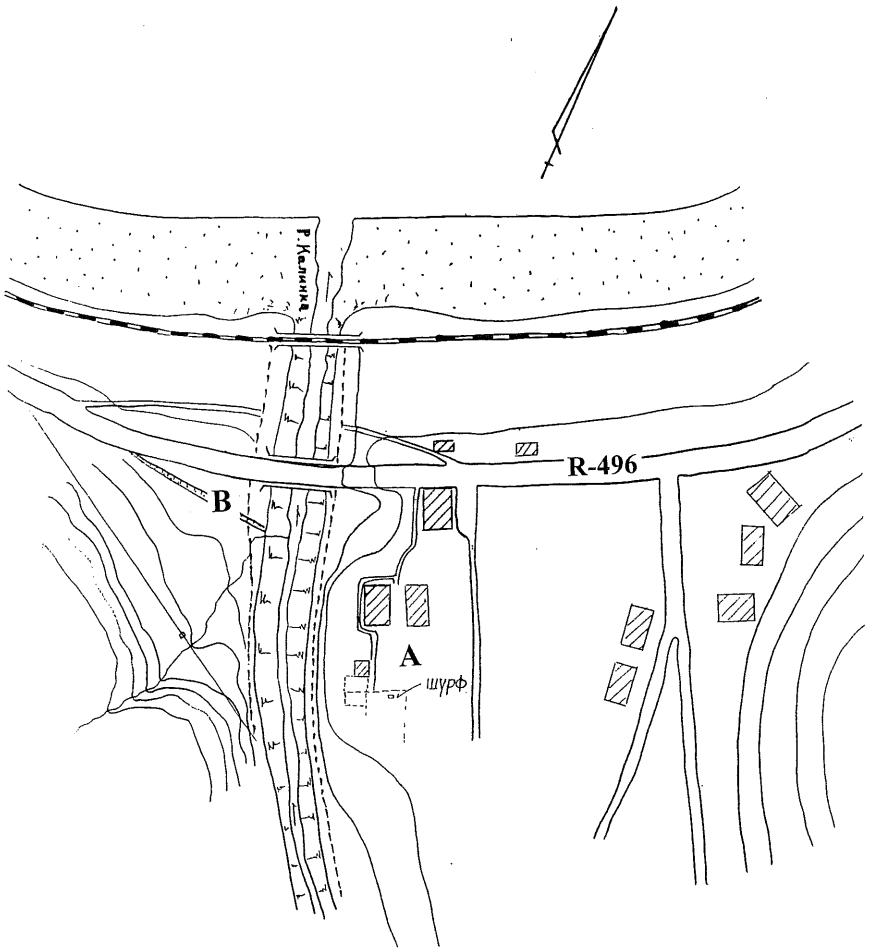


Fig.2 Kalinino-1

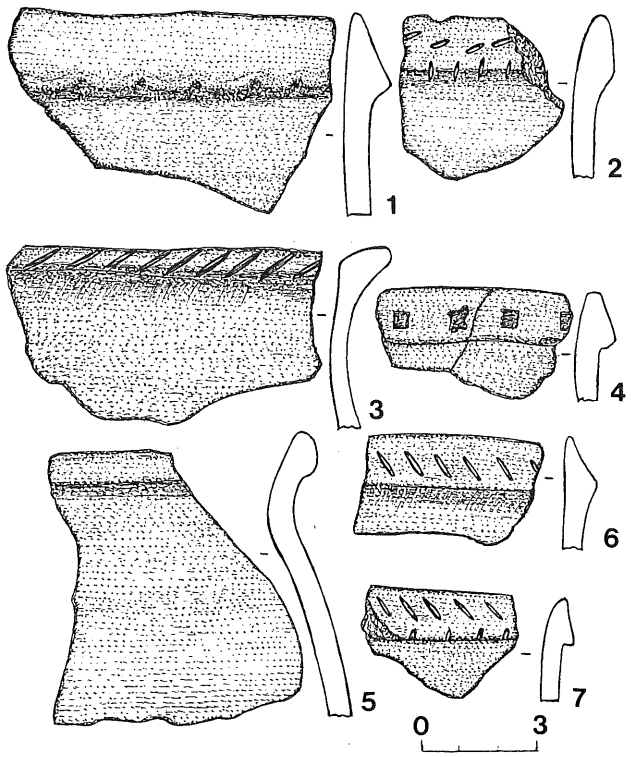


Fig.3 Kalinino-1

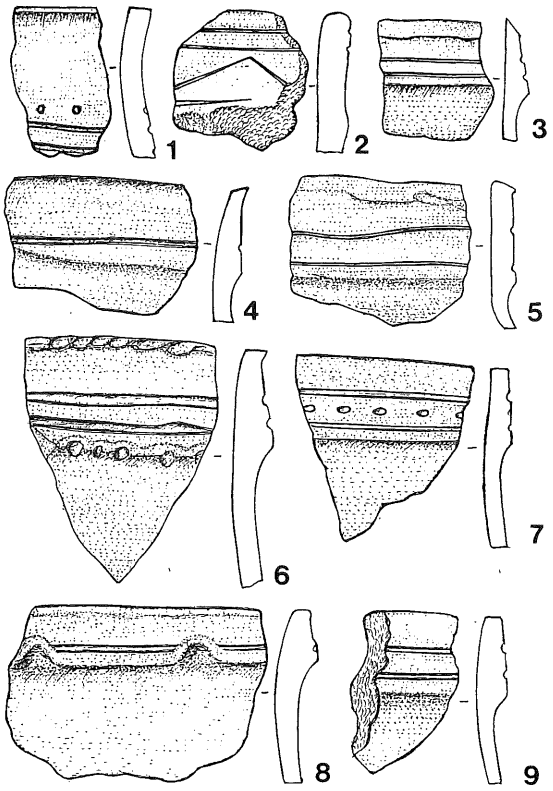


Fig.4 Kalinino-1

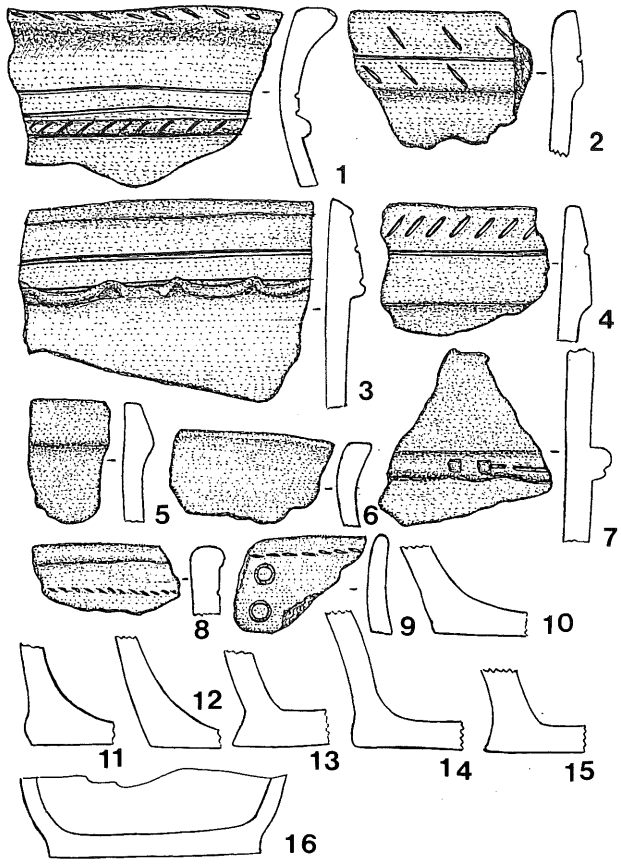


Fig.5 Kalinino-1

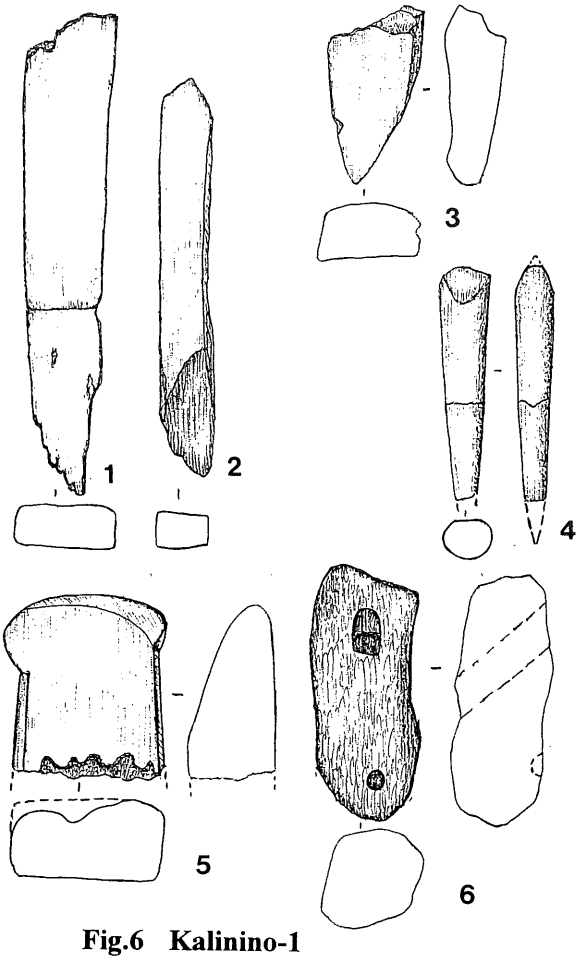


Fig.6 Kalinino-1

カリーニナ2遺跡　Kalinino-2

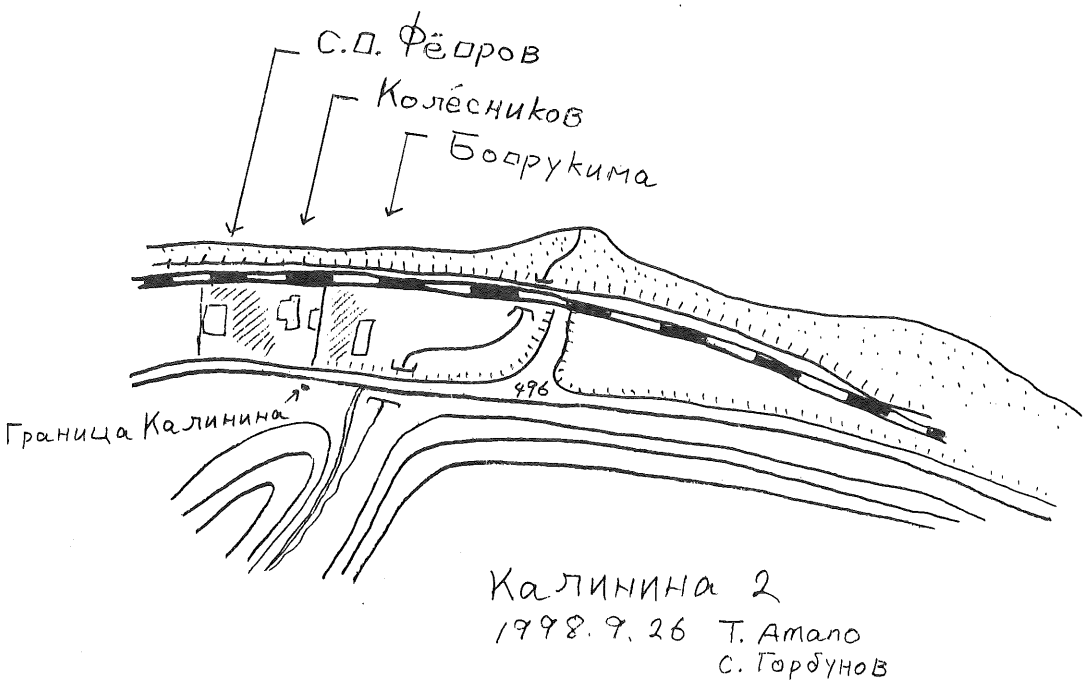
カリーニナ第2遺跡はロシアサハリン州ホルムスク地方カリーニナ村の南端にあって、カリンカ川河口の南方1kmのところでタタール海峡にそそぎこむ小川の南岸に位置する。

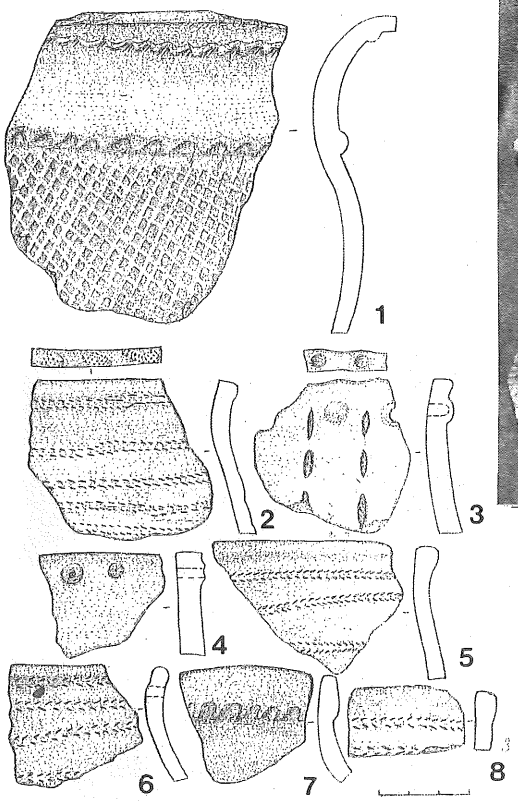
この遺跡は畑の中にあり、しかも遺跡の範囲内に鉄道と舗装道路通っているために、文化層はほぼ完全に撹乱されている。また先史時代の住居址の痕跡は残っていない。発掘調査はおこなわれていない。

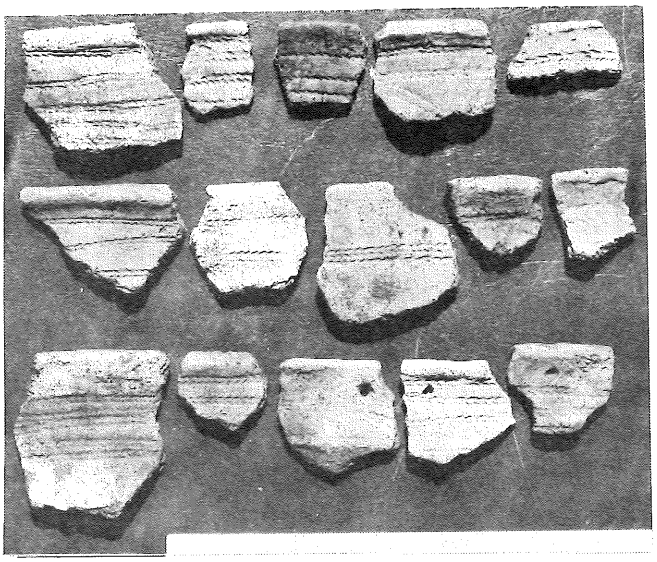
この遺跡はV.A.Golbevによって初めて考古学の文献に記載された[1]。またS.V.Gorbunovは1974年から1991年までたびたびここで遺物の表採をおこなった[2]。

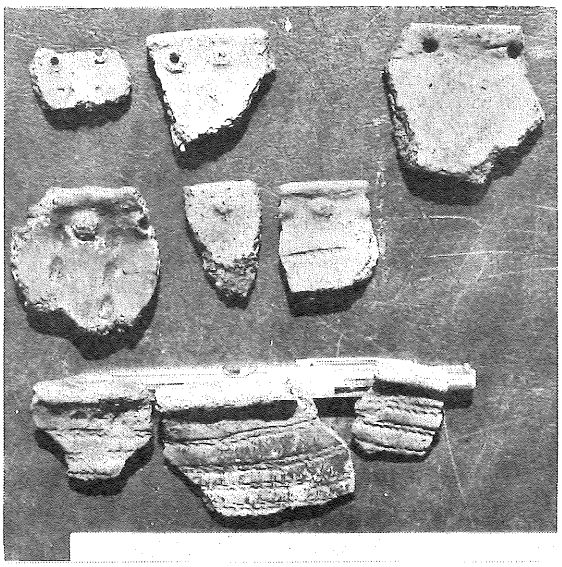
この遺跡では縄目文をもつ鈴谷文化の土器（鈴谷式）が主にみつかっている（図：2･5･6･8）。きわめてまれに十和田式（図3･4）と江ノ浦式（図7）の土器片がみられる。

口縁部を外側に折曲げて、指圧による波状の貼付け帯を2本その下にもつ土器片（図1）は大変興味深い資料である。この文様要素は十和田式に特徴的である。土器頸部の下はワッフル様あるいは新石器時代アムール流域にひろまった「アムール編み目文」式の文様が覆っている。「アムール編み目文」をもつ土器はこれまでのところサハリンではきわめてわづかしか知られていない。類例はカリーニナ第2遺跡のほかでは、サハリン北西海岸のZelenui Gai第2遺跡でS.V.Gorbunovによって記録され、またM.M.Prokofievの話では、破片2点がエトロフ島で、またクリリオン岬地域（木村信六資料）で1片みつかっている。これらの資料はユジュノサハリンスク市にあるサハリン州郷土博物館に収蔵されている。









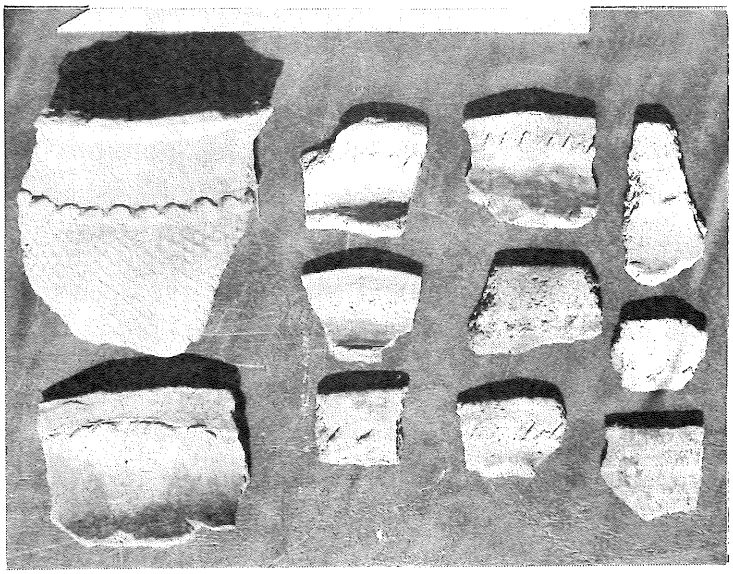


Fig. Artefacts Kalinino-2

イワーノフカ遺跡 Ivanovka

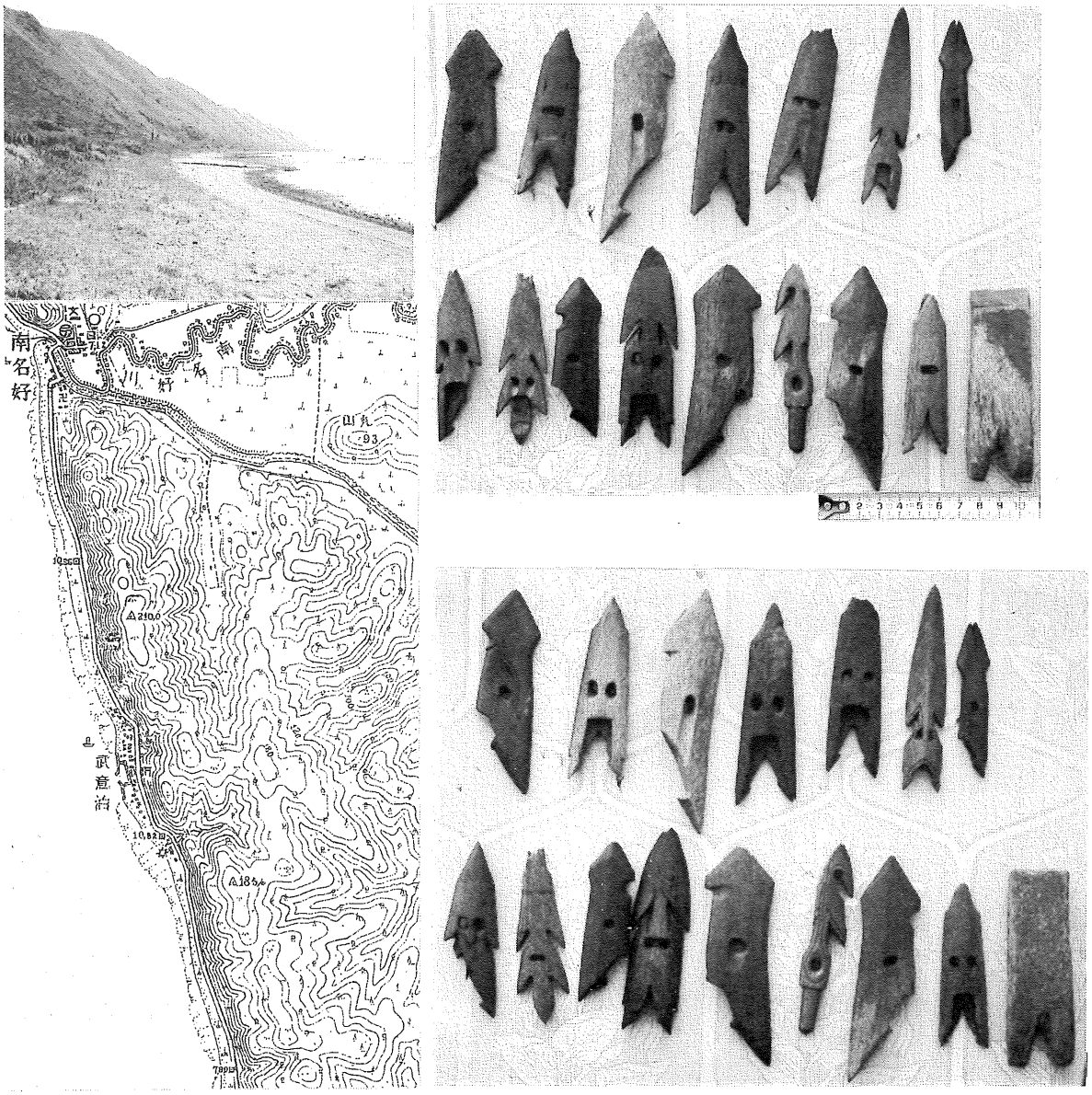


Fig.7 Wooden and bone artefacts collected by S.Gorbunov in Ivanovka

These artefacts, collected by S.Gorbunov in Ivanovka site, were burnt to ashes when his house was destroyed by fire in Pugachovo. Only some of the collection presented to the Nevelisk Historical-Regional Museum have been exhibited today.

S.V.Gorbunov "Zoomorfnye figurki stoyanki Ivanovka" Issledovaniya po Arkheologii Sakhalina i Kurilskikh Ostrovov II. Yuzhno-Sakhalinsk 1989

S.V.Gorbunov "Katalog arxeologicheskikh kollektsii Nevelskogo Istoriko-Kraevedcheskovo Muzeya" SVOD arkheologicheskikh pamyatnikov Sakhalina i Kurilskikh ostrovov 1996. Yuzhno-Sakhalinsk 1996

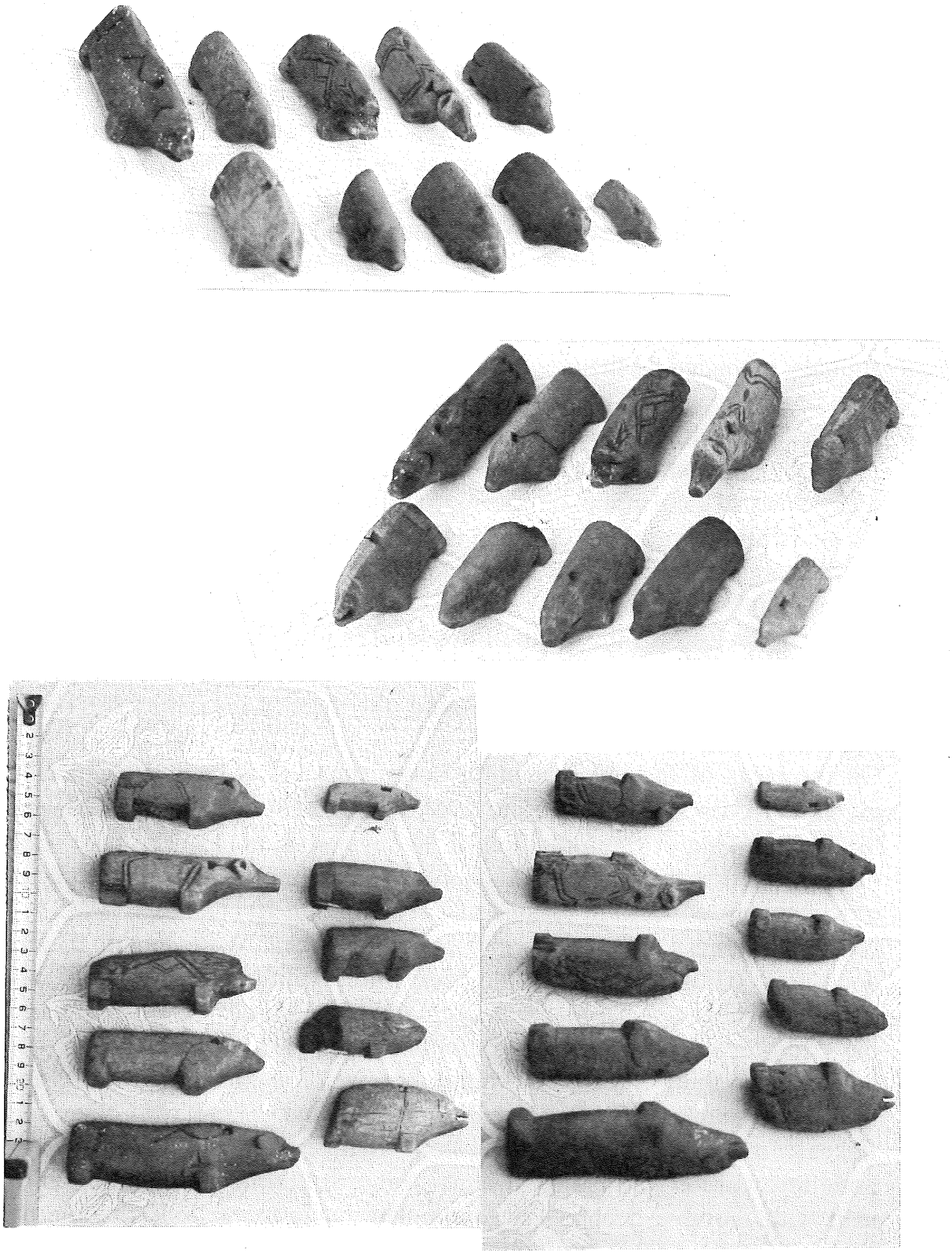


Fig.8 Wooden artefacts collected by S.Gorbunov in Ivanovka